

# 清月吟詠句集

二〇一三年版

インターネット俳句清月

清月吟詠句集 二〇一三年版  
五十音順

池下よし子	秋時雨	・	1
石崎そうびん	酔芙蓉	・	9
木村宏一	川床	・ ・ ・	17
清水恵山	梅白し	・ ・ ・	25
志村万香	冬霞	・ ・ ・	33
筒井省司	鴟	・ ・ ・ ・	39
橋本幹夫	茄子の花	・	45
森戸しうじ	大漁旗	・	53
山口美琴	炎天	・ ・ ・	59
湯沢正枝	鯨尺	・ ・ ・	67
野田ゆたか	春一番	・	75
あとがき		・ ・ ・ ・ ・	84

# 秋しぐれ

池下よし子

舞ふ巫女の袂膨るる初祓

池下よし子

繁昌亭寄席の餅花はなやげり

人日の地下街迷路さながらに

初ゑびす銘酒の樽のうづたかし

寒紅や本音はついに言えぬまま

天心の光あまねし寒の月  
熟成の若狭のへしこ寒見舞  
葉牡丹や小さき靴のわすれもの  
一輪に引き寄せらるる梅真白  
噂のいつか来た道母の里

池下よし子

二歳児の言葉ほつほつ露の臺  
紀の川の流れおだやか草若葉  
海と空溶け入る彼方霾ぐもり  
図書館の大きな窓辺新樹光  
再びの摩文仁の丘や夏帽子

池下よし子

サングラスかけ仮の世のブルーかな  
ひとり言聞かれたくなき水中花  
雨あとの首夏満月の隈なくて  
八月や紅き花咲く焼野原  
語部の声ほしほしと終戦忌

池下よし子

生身魂おしやれに余念なかりけり  
明日香路の里のしづけさ花卯木  
未央柳淡黄はかなき一日花  
輪の中にシェフのかんばせ盆踊  
あれやこれ過ぎし日のこと遠花火

池下よし子

絵日記に湖の水色夏終る

藍染のテーブルクロス涼新た

新涼や吾子の覚えし蝶結び

事も無げに二歳が飛蝗つかみをり

おだやかな母の晩年花茗荷

池下よし子

触れしより紅に翳りや桃の肌

池下よし子

旧家とて井戸あるくらし新豆腐

飛騨春慶仰ぎて喉へとろろ汁

飛騨郷の見せざる生活秋しぐれ

## 醉芙蓉

石崎そうびん

茜空いよよ濃くなり醉芙蓉  
彩りの布を晒して雪解川  
冴返る畳廊下を小走りに  
酒蔵へ延びしレールや紅椿  
はだら雪うだつの町の石畳

石崎そうびん

初蝶について漕ぎゐる三輪車  
昼酒のまはりの早し鯖膾  
廊下拭く僧の鉢巻樟若葉  
卯浪たつ釣人見えぬ釣筏  
伊吹嶺へ深く一礼薬狩

石崎そうびん

眉太き少年剣士五月来る  
産土の神の名知らず夏祓  
ガラス器の触れあふ音や夏暖簾  
古九谷の深きみどりや夏館  
舞姫は死語となりしか鷗外忌

石崎そうびん

湧水に沈めてありぬ水羊羹  
不機嫌な鴉の声や半夏雨  
工事場の厚き鉄板秋暑し  
揺れて待つ浮き栈橋や秋日傘  
県境は雲湧くところ吾亦紅

石崎そうびん

金木犀曲ること無き風の道  
城山に一雨来れば秋裕  
白雲の動かずにをり水の秋  
御岳の霧の降りくる蕎麦屋かな  
木の実落つ昔飢饉のありし里

石崎そうびん



紙漉女水のつぶやき聞くやうに  
頬被地に顔寄せて遺跡掘る  
校正のゲラ原稿に日脚伸ぶ  
伊吹嶺へひと刷毛の雲初景色  
餅花や梁百年の煤光

石崎そうびん

真っ白な鉢巻眩し弓始

石崎そうびん

# 川床

木村宏一

梅が香や絵馬の犇く天満宮  
踏青や廃線跡の空蒼し  
被災地に運び込みたき春の水  
取り込みを忘れし鉢に春の雪  
花さそふ疎水の流れ音高し

木村宏一

花咲きてなごむ心のあることも  
喧騒を遠ざけ一人花に入る  
新緑に誘ひ込まれて風となる  
雨上り丘に予期せぬ花うつぎ  
吊橋のゆれて見下す新樹光

木村宏一

紫陽花や朝改暮変ありしかな  
紫陽花や萼に乗りたる花の精  
夏薊ひと休みして坂の道  
梅花藻や見る人もなく盛りをり  
箸休め瀬音聞かせて川床料理

木村宏一

絵手紙や盛夏の文ん字やすらげり  
笹百合や香り波打つ笹の原  
田園に風のウエーブ秋立ちぬ  
光おく雫の香り秋の薔薇  
故郷の空の方角盆の月

木村宏一

雨上り枝垂れて重き萩の風  
萩の花源氏の世界めぐりをり  
三日月の西空に落つる速さかな  
臥待の月輝きて影ふたつ  
水面打ついのち預けて赤とんぼ

木村宏一

北大路紅葉求めてバスを待つ  
故郷の荷解くほどに柚子香る  
戻り路は静かに暮れて後の月  
故郷は石路の花咲く野にありぬ  
紅葉して一期一会の池に映ゆ

木村宏一

冬空へ絆照らしてルミナリエ  
山頂は樹氷の世界風荒ぶ  
春を待つ波まだ荒き昼の影  
日脚伸ぶ帰宅のペダル軽くなり  
初御空赤城嵐のありにけり

木村宏一

# 梅白し

清水恵山

ものの芽や赤子あやせば乳匂ふ

晩年は一筋の道梅白し

湯上りの菖蒲鉢巻走りくる

初めての吟行花のお濠端

晩節に適ふ暮らしや蜆汁

清水恵山

立てばなほ歩くを願ひ鯉幟  
賑やかな隣に鯉の幟立つ  
一族の墓を囲みて青田風  
夏近し少女の言葉大人びて  
仰ぎ飲む壘の玉鳴り夏めきぬ

清水恵山

蚊遣火を今日は多めに庭弄り  
送火や苧殻足しては独り言  
月走る嵐の前の雲の間に  
町内のうき浮きとして祭くる  
飲み干してラムネの玉を振つてみる

清水恵山

全身で赤子の泣くや日の盛り  
自販機の缶転び出る酷暑かな  
ちちろ鳴く生家の古りし通し土間  
山並みの燃ゆる気配の大夕焼  
指先が語る哀愁木曾踊り

清水恵山

里道に訛り幼き祭髪  
見返れば釣瓶落しや村暮色  
冬晴や硝子戸越に睡魔くる  
この里の訛り身につき七五三  
まだ奥に人の声する栗拾ひ

清水恵山



道問へば頬被り解く老婆かな  
庭小春犬の反身の欠伸かな  
晩節の歩み確り草紅葉  
鰭酒や自慢話の酔う程に  
歳ほど生きた気もせず年の暮

清水恵山

除夜の鐘億光年の星空へ  
通し土間古りし竈や鏡餅

清水恵山

## 冬霞

志村万香

三山の墨絵ぼかしに冬霞  
夜の梅白く浮かびて暉けり  
川底の藻の流れにも春模様  
残雪や轟轟と吹く山の風  
恋文を秘めてそぼ降る花の道

志村万香

春光の雲とどまりて宙青く  
楊貴妃の肌の匂ひは白牡丹  
雨上り泰山木の花仰ぐ

稚児車群がりて咲き人を恋ふ  
あぢさゐの毬めかしゆく日照雨かな

志村万香

女郎蜘蛛金の糸はり紋描く  
皇后の胸に抱かれ合歡の花  
青田風戦ぐ上にも雲の影  
夕暮の端居によせる老いの花  
ゆるゆると精霊船を押出しぬ

志村万香

ゆらゆれて頬をあわせる秋桜  
白萩の乱れ咲きたる夕べかな  
庭の風廊下の風も秋のもの  
あの人に良く似た雲も秋の空  
山々の稜線の色秋深し

志村万香

幽玄の天から落つる冬景色  
冬すみれ誰を待つとも知らずして  
息白く坂がかりきし散歩道  
富士の山歲月刻む冬帽子  
昭和史も雪の花散る道しるべ

志村万香

## 鴟

筒井省司

鴟 高音朝の空気をひきしめり  
耕して短き畝をふり返り  
ゴーヤ植ゑ窓に合はせて張るネット  
菜の花に戯る羽音雲白し  
パソコンで桜前線追ひかけり

筒井省司

狭き庭二人でいじるみどりの日  
風薫る證誠寺の庭や狸塚  
散歩道時間を止めて時計草  
軒下に十薬の束懐かしき  
梅雨晴間プロのいでたち庭手入

筒井省司

去年より五日遅れの胡瓜かな  
炎昼や妻の寢息にテレビ消す  
散歩道足元に落つ蝉哀れ  
側溝に露草の花見え隠れ  
焼秋刀魚大根おろす武骨な手

筒井省司

高塀を越えて木犀香りをり  
万歩計刈田の風に数を増し  
団栗の落ちてころころ坂の道  
烏瓜山の陣地の道しるべ  
坪庭の淋しさ消して石露の花

筒井省司

老妻の煮込大根琥珀色  
笹鳴の艶も増しつつ散歩道  
自画自賛男料理の蕪スープ  
大寒や病院の朝混み合へり  
老い二人襟を正して屠蘇祝ふ

筒井省司

## 茄子の花

橋本幹夫

一日も無駄な日はなし茄子の花  
春雨に赤き煉瓦のさらに濃し  
行先の定まらぬまま春岬  
安居や妻と分け合ふあぶり餅  
鮑海女陸の木陰で紅をさす

橋本幹夫



軽鴨の子の殿は振り向かず  
蝙蝠に昼の美学と夜の美学  
喧噪の火種は杜の青葉木菟  
ふる里は遠に忘れし蛇の衣  
ダム工事待つ廃村の噴井かな

橋本幹夫

扇風機首振る中のお飯事  
遠泳や貫ふ乾パン香ばしき  
かなぶんの発止発止と蔵の壁  
文月や供華と遺影の文机  
秋早あつけらかんと河馬沈む

橋本幹夫

墓洗ふ妻の亡骸拭くやうに  
残る蟬ぱたぱたと地を這へり  
花茗荷風の全く吹かぬ径  
残り湯で流す言ひ訳白露の夜  
八朔を祝ふ老舗の吉備団子

橋本幹夫

妻の香の残る枕や寝待月  
思ひ出の褪せて伸びたる秋簾  
枝豆やひよいと含蓄ある話  
菜虫とるひよつこり母が出て来さう  
仕留猪俺にくれると言われても

橋本幹夫

団栗や少年にある反抗期  
幸せは冬の湯槽に浸るとき  
口切や雄町の水を汲みにゆく  
陸に武者海に強者天に鷹  
念じれば花の振り向く帰り花

橋本幹夫

翻り亦輝ける柿落葉  
馬銜を噛む馬の涎や日向ぼこ  
悴める五指で応ふる栄誉礼  
大匙に湯気の絡まる齋粥  
騎初の白き牝馬の上機嫌

橋本幹夫

## 大漁旗

森戸しうじ

寒鰯や伊根の舟屋の大漁旗  
鶯の声追ふ顔の同じ向き  
はね太鼓相撲そぞろや春浅し  
ポイ捨ての缶拾ひつつ耕せり  
無限大描きて空の親燕

森戸しうじ

駘蕩の風吹く気配彼岸入る  
しばらくは空を占めたる花のなか  
わが庭の花散るころは三日のち  
春の日を確かめながら耕せり  
加速してビルの谷間の青嵐

森戸しうじ

辻仏暑さ負けせぬ座り胼胝  
戸隠や笹の香に盛る冷し蕎麦  
炎天に数珠をいただく善光寺  
真夏日や魁夷の描く白き馬  
大雷雨夜泣きした児は深眠り

森戸しうじ

青岸渡寺巡礼の秋始まりぬ  
滝壺の埋もれし那智の秋時雨  
稲の香の吹きあつめてや風の道  
近況を語り尽して今年酒  
路地に散る紅葉のままの日暮かな

森戸しうじ

灯笼の点燈合図 冬花火  
冬の星きらり流れて闇に入る  
氷面鏡小波そのまま残りけり  
白水仙大波の果てて咲くところ  
初暦知らぬひと日の始まりぬ

森戸しうじ

# 炎 天

山口美琴

炎天に一步踏出す決意かな  
天蕎麦や春菊の香の際立ちて  
残雪や尾根にまぶしき空の蒼  
少しづつ明るさ増して山笑ふ  
門口に一際目立つ黄水仙

山口美琴

観潮船足踏ん張りて覗き見る

新しき生命育む竹の秋

のどけしやコーヒータイムのひとり言

松落葉波音静か誓子の碑

豆飯のみどり香放つ夕餉かな

アマリリス内緒話を聞いており

青梅雨や介護士ひとり手際良き

梅雨晴や沙汰問ふ友の声弾み

蝙蝠やかからすが帰る茜空

廃線のなごりとなりて明治草

山口美琴

山口美琴



アイスクリーム好みがありて三世代  
編笠に女秘めたる風の盆  
東北の強き絆や震災忌  
旅誘ふネット検索白露かな  
あらし去り十五夜仰ぐ明の空

山口美琴

ほこほこと零余子飯喰ぶ里の味  
紅葉山陰と陽となる秘境かな  
桜葉の散急がせる雨となる  
地場産のグルメ祭りや文化の日  
茶の花や一と枝活けてお点前に

山口美琴

風邪の床日中の音のさまざまに  
冬休み会話弾みし昼餉かな  
枇杷の花少し大人に近づく子  
朝霜や皇帝ダリア朽ちてゆく  
寄植のミニ葉牡丹の競ひ合ふ

山口美琴

節分の鬼に挑みし園児たち

山口美琴

鯨尺

湯沢正枝

春寒や味増出す蔵の薄暗き  
埋立ての土黒々と犬ふぐり  
のんびりと穀雨の雨の農休  
花冷の遠嶺へ朝日燦々と  
犠牲者に黙禱捧げ春の風

湯沢正枝

シクラメン一足先に届きけり  
真青に茹で上げ春の菜のかをり  
一人静英霊墓地の日だまりに  
花かげの郷と歌はれ花りんご  
晩酌の少し早めに菜種梅雨

湯沢正枝

早起きの至福の時や夏つばめ  
薔薇一輪もつて話の弾みけり  
テレビ塔高く聳へて青葉風  
風薫る駅前広場の姉妹像  
駒鳥や一人の時間ほしいまま

湯沢正枝

九千歩歩いて来たり五月晴  
扇風機まわる老舗の予約席  
甘酒の発酵の桶ぶつぶつと  
一息を大きく吸って九月かな  
コスモスの咲くや棚田の通学路

湯沢正枝

今年度末で廃校へちま熟る  
目の手術すめばいつしか秋の風  
秋深し薬草袋浮かす風呂  
魯田に富士北麓の風荒し  
綿虫の舞へば大空低く垂れ

湯沢正枝

腐葉土のふわつと軽き冬初め  
短日の心せかれる美容院  
習はしに習ひ冬至の南瓜切る  
白菜を結はふ老父の日ざし濃し  
年賀状書き終へ年を締めくくる

湯沢正枝

穏やかな湖面に富士の雪の貌  
記念にと植ゑし臘梅かをりけり  
竹音の村に弾けてどんどかな  
峠路を一つ挟んで初電話  
縫初や昭和日付の鯨尺

湯沢正枝

春一番

野田ゆたか

国生みの島波立てて春一番  
朝の陽を柔らに返し草青む  
庭抜けて梅が香聞いて帰られよ  
先づ音の生れて水のぬるむ川  
木の芽風狭庭の黙をほどきゆく

野田ゆたか

啓蟄や出合頭に知己の貌  
引力と打力のはざま紙風船  
朧夜の虚実の境模糊として  
登りきて雲上閣は花の雲  
雨やんで茅花流しの夜となりぬ

野田ゆたか

刻なしの鶏鳴長閑陶の里  
薔戸の開け放たれて寺薄暑  
竹伐会女蛇竹山へ植ゑ戻す  
もがくほど術中に落ち蟻地獄  
算額の無限大へと風薫る

野田ゆたか



被災地を熱く語りて帰省の子  
確かめて風鈴を吊る風の道  
駈込みて化粧直す娘冷房車  
偲ぶ人星に重ねて魂送る  
朝顔や白の主張の清々し

野田ゆたか

盆僧の法話に落ちのあることも  
拙句とは謙遜されて敬老日  
煌々とホ句の余情をつなぐ月  
ささ濁る櫓の小川の野分あと  
余生にも戻らぬ月日秋惜む

野田ゆたか

庭たたき来てはダンスを繰返す  
ゆく雲に毛槍突上げ時代祭  
ぬつと友現れさうな小春かな  
俳聖の臨終地の碑银杏散る  
冬晴や庭に出てゐる喫煙者

野田ゆたか

焼鳥の炉にこだはりの炭火かな  
街暮れてポインセチアに夜の顔  
ルミナリエてふ華やぎも師走かな  
添ふ影の雪女郎めき町更くる  
寒椿寺苑の黙をほどきゆく

野田ゆたか

雲一朶かかる生駒峯初景色

四日早や常の暮らしに嫁が君

野田ゆたか

あとがき

この句集はインターネット俳句・清月に平成二四年中に佳句を出句  
されました会員一〇人に私の句を加えて編集作成したものです。  
作句は、楽しくありたいものと願っておりますが、こうして句集に  
まとめてみますと、どの句も作者の立ち位置や情景が目には浮かび作句  
を楽しんでおられる様子が伺えて嬉しくなってきました。  
このたびPDFファイルではありますが清月吟詠句集をアップで  
きました。  
皆様にご高覧あるいは印字のうえ和綴じにして保存いただけました  
ら幸いです。

平成二五年五月吉日

大阪清月庵 野田ゆたか

平成24年12月の清月出句者ご芳名

会員別	ご芳名	居所	入会年月
同人	木村宏一	大阪	平15.07
会員	森戸しうじ	大阪	平15.04
会員	湯沢正枝	山梨	平18.02
会員	駒田暉風	愛知	平18.06
会員	石崎そうびん	岐阜	平19.05
会員	石川順一	愛知	平20.01
会員	橋本幹夫	岡山	平20.06
会員	志村万香	山梨	平21.08
会員	池下よし子	吹田	平21.11
会員	山口美琴	三重	平22.01
会員	清水恵山	千葉	平22.07
会員	筒井省司	千葉	平23.07
会員	堤千鶴子	兵庫	平24.07
会員	田村公平	千葉	平24.10
準会員	山溪		平21.09

発行  
2013年6月1日

発行人  
野田ゆたか

発行所  
大阪清月庵  
(枚方市)

清月俳句会のホームページ  
<https://haiku575.info/seigetukai/home/home.htm>